

「ジオパークによる地域活性化をめざして —地域と地質学者の連携のあり方をさぐる—」参加報告

濱崎 聡 志¹⁾

2009年9月5日, 岡山市で標記ワークショップが開催され, 日本ジオパーク委員会 (JGC) 事務局として参加しました。日本地質学会主催の本ワークショップは, 2009年度の同学会年会在地質情報展と期を同じくして岡山理科大学で開催されていたため, 地質情報展会場となった岡山駅前の岡山市民プラザ内で行われたものです。

折しもその2週間前, 日本初となる世界ジオパーク認定という高いハードルを越えた3地域が誕生しました。洞爺湖・有珠山, 糸魚川, 島原半島です。この3地域は, 2008年10月の第4回JGC委員会において, 世界ジオパークネットワーク (GGN) への申請候補地として決定し, 同年12月にGGNへの加盟申請を行っていました。その後, 2009年7月から8月にかけて, GGNによる現地審査が行われました。そして, 同年8月23-25日に中国泰安市で開催のInternational Symposium on the Development within Geoparksに先立ち, 同地で8月22日に行われたGGN Bureau Meetingにて最終審査が行われ, 翌日23日の同シンポジウムの席上, ユネスコ自然科学局により, GGN加盟認定が発表されたものです。本ワークショップは, 世界ジオパークに認定されたこれら3地域の実例をもとにして, 今後多くのジオパークが誕生することを目的に開催されたものです。

ここで, 「ジオパーク (Geopark)」って地質に関係しているのはわかるけど, 要するに何なの? 何のために始まったの? と思う方もいるかもしれません。ジオパークとは, “地球活動に関わる貴重な地質, 地形 (geo) を中心とする大地の公園 (park)” と定義されますが, それに関連した動植物の生態系や, 火山信仰などにまつわる文化遺産なども含みます。学術的重要性, 希少さ, 美しさを持つ地域をジオパークとして認定し, それを保護・保全しながら次の世代へ継承し, 研究の場だけでなく, 地元市民や子供たちへの環境教育の場としても活用します。それによって子供の頃から地元の自然に関心を持ち, それが地元への誇りとなり, 大人になって外に出て自信を持って地

元のことを考えられるという期待も込められています。さらに, “ジオツーリズム” (地学見学旅行) を通じて多くの観光客を誘致することによって, 地域社会の経済的活性化にもつなげようというものです。したがって, ジオパークとは “学びながら楽しむ, 楽しみながら学ぶ, 大地そのもののテーマパーク” とも言えます。ユネスコの支援を受け2004年にGGNが設立され, 2009年9月現在, 19カ国, 64地域が世界ジオパークに認定されています。日本でも2008年5月のJGC発足後, ジオパークに関する認定が始まり, 2009年11月現在, 11地域 (GGN加盟3地域を含む) が日本ジオパークに認定されています。JGC発足以来, 産総研地質調査総合センター (GSJ) が事務局業務を担っています。

さて, 13:00に始まったワークショップは, 会場閉館の18:00でやむなく終了という非常に熱のこもったものでした。会場定員70名余に対して, 追加の椅子と立ち見客で, 参加者総数は約80名という盛況ぶりでした。大多数はおそらく地質学会員でしたが, 情報展に来られたと思われる一般の方もいました。また, ジオパークに申請中および申請準備中の地域からも講演者+1-2名, さらに, 前日に産総研に取材に来られたNHK解説委員の方も急きょ岡山へ駆けつけました。

ワークショップは第1部, 2部に分けられて進行しました。第1部ではGGN認定の3地域から, ジオパークの概要, 申請の背景と経緯, GGN現地審査, 認定後の課題などが報告され, 自分たちの教訓をもとにしたアドバイスがありました。現在ジオパークを目指している地域にとっては, 全てが教科書になったことと思います。3地域に共通していたのは, 地元と一体になった活動はかなり以前から始まっていたもので, ジオパークはその延長であったということでした。「運営組織の充実を含めた地元からのボトムアップという助走が重要。そのためには時間がかかる。」という言葉には非常に重みがありました。現在目指している地域の方々にとってはズシンとくるものがあつたのではない

1) 産総研 地質調査情報センター

キーワード: 地質情報展, ジオパーク, 地域, 地質学者



写真1 島原半島ジオパークの講演。



写真2 隠岐におけるジオパークへ向けた市民活動の例。

かと思えます。

3地域は、世界ジオパークの認定を受けて、以下のように提言しました。

- ・洞爺湖・有珠山：今後は、商業品などジオ以外の要素の充実、観光分野との連携、若い科学者と地元の人との確保、モチベーションの維持などが重要である。主役は地元であり、科学者はあくまでもサポート役である。
- ・島原半島：ジオパークは地質遺産だけでは不十分。熱意を持った「人」が必要である。GGN現地審査では、誰がどのような夢を描いてどのように取り組んでいるのかが審査された。プランのないジオパークはあり得ない。
- ・糸魚川：GGN現地審査から学んだジオパークとは、保護、教育活動、ジオツーリズムであった。市民のボトムアップが何より大切で、そのためには市民にわかってもらうことが先決。出前講座が重要。申請書や解説板のために地質学の学芸員を増やすことも必要である。

第2部では世界ジオパーク申請候補地として申請中の山陰、室戸、日本ジオパーク申請中の阿蘇、隠岐、秩父、そして申請に向けて準備中の環霧島の各地域から講演がありました。申請中の地域は、基本的に2009年7月10日の第5回JGC委員会でのプレゼンとほぼ同じ内容の説明でしたが、そのときはジオの売りをアピールする内容だったのに対し、今回のワークショップでは各地域とも地元との連携や教育普及活動の実績を中心としたものでした。どの地域も、ジオの充実だけでなく、地元と一緒に頑張ってきている印象を強く持ちました。主な質疑応答では、国立公園とジオパークの範囲の関係、運営組織の形態、拠点となる博物館との連携、ジオと地元文化との関連など、多くの質問が出されました。申請中の地域に

とっては、本ワークショップは、7月から9月にかけてちょうどJGCによる現地審査が行われている最中の開催となりました。一方、申請準備中の環霧島地域からは、市の担当者によって、申請を延期した背景と理由が話されました。旗振りが行政中心であったため専門家や地元との連携が必ずしも十分でなく、申請することが大きな目的になってしまっていたことなどがありのままに話されました。しかし、申請延期が新聞報道されたことにより、逆に、ジオパークに対する地元の認識が高まり、現在では、拠点施設を含めた組織体制の整備や、教育・啓発に関する地域住民の取り組みなどが進んでいるということでした。

洞爺湖・有珠山、糸魚川、島原半島の各地域とともに、世界ジオパークに認定されてから多くの観光客が訪れるようになりました。地元の宿泊施設や交通機関などの利用も増えています。地域振興への経済的な波及効果は確実に表れています。これらの地域が成功例となれば、ジオパークが地域浮揚の起爆剤に十分なり得ることを示せるでしょう。また、ジオパークに認定された地域では、大人よりも子供たちの方が地元のジオに詳しくなり、それが自分たちの住む街へ高い関心を持つことにつながっているところもあります。このような社会的側面からもジオパークが地域活性化をもたらし始めています。さらに、地学離れが叫ばれている昨今、ジオパークを通じて、自然現象のなかの特に地球科学に対する子供たちの興味が増してくれば、地学教育の普及にも大きく貢献できると思います。

HAMASAKI Satoshi (2010) : Report of symposium to construct cooperation between local areas and geologists toward the local revitalization by geopark".

<受付：2010年3月10日>